

上演 4

2023年7月30日4校目

北海道 ブロック（北海道）

北海道網走南ヶ丘高等学校

「スパイス・カレー」

第47回全国高等学校総合文化祭演劇部門

第69回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

福島県立橘高等学校（福島県）

渡邊 凌惺

全体的に日常生活のリアルさがよく追求され、親近感と共に多くの想いを受け取ることができた。また人の温かさに満ちており、自分の家族をより深く愛することができるような、そんな作品であった。

祖母の死を受け、思い出のレシピを再現しようとする絵里香。スパイスカレーを作る中で、進路の話での母からの厳しい言葉や、祖母の死に対する母の態度が気に食わず、彼女は母に不満を覚える。コロナ禍で看護師として働く母は、労働の厳しさを知っており、たとえ祖母が入院していようが私情を持ち込むことはできないことを、娘には伝えない。それをひとこと言えば、母娘の問題はすぐに解決するはずなのに、言えないところに母娘の間の意思疎通の不器用さが見て取れる。しかし、最後には祖母が残したスパイスカレーのレシピを介し、母娘の愛がしっかりと互いの心の中に伝わっていく。その美しくも不器用な愛の成熟に大きく心を動かされ、多くの委員が涙を流し、それぞれの家族に思いを馳せていた。

主人公たちが歌っていた「カントリーロード」。劇中で、祖母が主人公たちに教えていたというこの曲には「孤独を恐れない」という意味合いもある。そのため我々は議論の中で、祖母は彼女たちに1人になることを恐れずに、将来へ向かって前に進んで欲しいと願い、この歌を教えたのではないかと考えた。

この劇では、キッチンや家電など大部分の大道具は枠だけの無機質なものだったので、我々は役者の卓越した演技で目に見えない部分を補足して観劇していた。だが、その中で唯一ダイニングテーブルだけは実物で、登場人物の大事な思い出を刻んだ家具として存在していた。亡き祖母の定位置に母が座り、娘が作ったカレーを食べる。そして涙ながらに「おいしいよ」と伝えるラストシーンでは、向かい合って座る娘に対しての謝罪や感謝、さらには天国から見守る祖母への惜別の念といった様々な思いが、素朴なテーブルに座る母の背中越しに伝わってきた。

